海外提携研究機関

COE国際シンポジウム参加記

世界文明論構築の新視野

王　勇（中国　浙江大学日本文化研究所所長）

神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の海外提携研究機関（浙江大学日本文化研究所）の長として、わたしは二回、COE本部にお邪魔したことがある。

一回目は2004年10月6日のことで、福田アジオ先生より事業概要の紹介を伺いながら、脳裏から文字を懸命に追い出して、非文字文化の構図を描こうとした。何かの弾みに、話はわたしが一時的に没頭している鍾馗像に及び、中国の鍾馗と日本の鍾馗の伝授と変容を紹介すると、福田先生は「これぞ非文字文化研究の対象だ」といわんばかりに、日本各地にみられる鍾馗信仰の図像を探し出して見せてくれた。これが非文字資料をはじめて意識的に研究に生かしたきっかけである。

二回目は2005年11月26～27日に開催された第1回COE国際シンポジウムで、テーマは「非文字資料とはなにか―人類文化の記憶と記録―」である。個々の報告内容については、COE編纂の報告集にゆだねるが、二日間にわたる発表とディスカッションを聞いているうちに、歴史研究者としてのわたしは、激しい思索に誘われ、方法論の葛藤だけでなく、従来より植えつけられた文明論そのものさえ揺さぶられたのだった。

日本古代史を専攻するわたしにとって、文字資料を重視することはいうまでもないが、文字資料のなかでも、とりわけ「正史」（勅撰歴史書、日本の場合は『六国史』がそれに相当する）を信頼し、一般人の書いた歴史書を「野史」や「雑史」または「稗史」と称して、一段低く見る傾向に慣れている。

思えば、正史というのは五位（中国では五品）以上の役人のことしか記さないのである。それも国家の大事つまり「公事」に限られ、個人的な「私事」は基本的に記述の対象とならないわけだ。

ところが、世の東西を問わず、古代に遡れば遡るほど、識字層は少数派に属し、文字を知らない民族は今でも存在しているはずだ。たとえ文字を知る知識人であっても、かれらの生活のごく一部にしか文字を使わないのである。19世紀、アメリカ人類学者 L. H モルガンの名著『古代社会』によって、文字の使用が文明社会の開幕とされ、「人類の文明史はすなわち文字の歴史だ」という通念が流行り、多くの研究者はその固定概念に囚われてきた。そのため、文字世界と縁の遠い古代庶民の生活および文字に記されていない知識人の営為は歴史家の視線から遠ざかり、民俗学者の視野にとどまるのみとなった。

人類の歴史を振り返ってみれば、文明創造の活動は文字に記されるものよりも、色彩があり、動きがあり、音声があって、多様多彩なものだったのである。つまり、人類の文明史は文字によって記されただけでなく、さまざまな道具、絵画や彫刻、そして建物や景観などにも刻まれているはずだ。また、世界各地にみられる特有な文明創造の遺伝子は、現代人の手まねや身振り、しぐさや作法などの身体技法にも記憶されている。

こうして、しばらく文字の世界から目をそらして黙想すると、眼前に非文字文化の世界が音色にあふれて無限に広がっていくような気がする。これが他ならぬ国際シンポジウム「非文字資料とはなにか―人類文化の記憶と記録―」に参加しての率直な感想である。

膨大な非文字資料に関して、従来、民族学者や言語学者それに美術研究者らによってまったく渉猟されなかったわけではないが、画像・道具・景観・伝承・作法・音声・建築などといった個々の事象を体系づけることが、福田アジオ教授を代表とする神奈川大学COEプログラムの目指す目標だと思う。この大業を成し遂げたときは、世界文明史が再構築される時であるに違いない。

わたしどもの研究所は由縁あって、2005年12月をもって、浙江大学から浙江工商大学に移転し、今後は引き続き海外提携研究機関として、この世界文明史再構築の偉業に加わらせていただきたく存じる。

非物質文化遺産研究との連携

王　暁葵（中国　中山大学中国非物質文化遺産研究センター助教授）

この度、神奈川大学21世紀COEプログラム海外提携研究機関関係者として、国際シンポジウム「非文字資料と

はなにか―人類の記憶と記録―」に参加した。僅か2日間の会期だが、密度高い研究発表及び質が高い討論で、刺激に満ちた知的盛宴であった。

人類文化を考えるには、文字資料より「非文字」の部分は遥かに豊富だ、という事実は常に忘れがちである。それは文字の力によるものであり、「研究資料」としては文字化したものが比較的扱いやすいという面もある。しかし、人類文化を「立体的」、「総合的」に把握するには、文字化されたこと以外の人間の活動、しぐさ、音・におい、感触、景観、味覚、写真などを分析する必要がある。その第一歩としては資料を蓄積・整理することである。世界中異なった民族の身体技法、祭祀芸能、民俗技術などを如何に研究資料として「体系化」するかは、極めて重要な課題であり、困難に満ちた挑戦でもある。

この雄大な構想は今度のシンポジウムを通して、その実現の可能性を見ることができた。今回のシンポジウムは、絵、写真などのメディア、身体技法・祭祀芸能、民具と民俗技術、非文字資料の情報化と教育という4つのセッションに分けて研究報告・討論された。いずれも従来の研究分野の蓄積を踏まえ、新しい「非文字資料」という枠組みに位置づけ、分析の手法や扱う対象はそれぞれであるが、千差万別な人類の知識・観念・行為を一つの土台で論議することは「新たな学問分野の創出」、「普遍的な研究方法論の確立」への第一歩となると思う。

川田氏の基調講演で、お互いに影響しあう文化の比較研究は重要であるが、それぞれ独自に起源・発展してきた文化間の比較研究が同時に行わなければならないという「文化の三角測量」説はきわめて刺激的・魅力的な問題提起だと思う。これを応じるような形で、今回の研究報告は日本、中国、韓国、フランス、ロシア、イギリスなどの国の「非文字」資料が分析・比較された。今後はこれを踏まえ、範囲を拡大し、「人類文化を覆う」ことへ向けて着実に進めていくと予想される。

また、非文字資料の情報化と教育についての報告は先端科学技術を取り入れ、オンドロジー理論などの電子情報工学分野の理論・手法を文化研究に応用する試みは、今後の人文科学の研究に一つの方向を示している。これは学際間の緊密な連携でこそできることで、神奈川大学21世紀COEプログラムの研究体制の強さを見ることができた。

我々の「中山大学中国非物質文化遺産研究センター」は2004年4月に中国教育部重点研究基地として認定され、演劇、民間伝承、伝統行事などの「非物質文化遺産」（無形文化財）を中心にプロジェクトを組んで、研究調査を進めていた。（現時点で国のプロジェクトとして進めているのは「中国影絵芝居の調査研究」と「無形文化財分布図の製作に関する基礎研究」である）我々が研究対象としているのは殆ど「非物質的」であり、「非文字」的なものでもある。従って、シンポジウムの報告から参考にすることは極めて多い。当センターと神奈川大学21世紀COEプログラムとの交流は今年始まったばかりだが、今回のシンポジウムを通じて、相互の理解を深めることができ、今後共通の分野においてさらなる緊密な関係を築くことを期待している。ちなみに、神奈川大学21世紀COEプログラムの目標の一つは「国際的な研究ネットワークの形成」である。我々は海外提携研究機関として、これを実現するために全力で協力をしたい。

最後にシンポジウムの主催者及び関係者へ心から感謝の意を捧げたい。

人類文化研究の新しい天地

陳　勤建（中国　華東師範大学中国民俗保護開発研究センター所長）

二年前に、神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究拠点リーダー・福田アジオ教授の招きによって、私どもの「華東師範大学中国民俗保護開発研究センター」が、その提携研究機関となった。以来、神奈川大学COE側は、RA研究員、博士後期課程在学の中国人留学生・彭偉文を本研究センターに派遣し、2005年9月17日から9月30日の間に、短期訪問研究員として研究を行った。また、本研究センターの文芸民俗学専門の博士課程在学生の毛巧暉、尹笑非両氏も、前後して神奈川大学に行き、訪問研究員として研修し、その目標を円満に達成した。2005年11月25日～28日に、私は招待に応じて神奈川大学21世紀COEプログ